

# 肢体不自由児の仲間関係の形成および、

## 身体活動の変化に関する研究

—統合保育における参与観察から—

安本奈月\*・三木裕和\*\*

A Study on the Formation of Relationship with Others and Changes in Physical  
Movements of Physically Disabled Children

- Based on Observation of Integrated Child Care -

YASUMOTO Natsuki\*, MIKI Hirokazu\*\*

キーワード：肢体不自由児，仲間関係，身体活動，統合保育

Key Words: Physically Disabled Children, Relationship, Physical Movements, Integrated Child Care

### 1. 研究の目的

現在，日本では少子化により，全体として子どもの数は減少しているものの，障害児保育に対するニーズは高く，多くの保育所で障害児を含めた統合保育を行っており，1万1千人以上の障害のある子どもたちが保育を受けている<sup>1</sup>。

統合保育では，障害児と健常児に同じような生活が保障されるようにというノーマライゼーションの理念や，どんな子どもに対しても，その子のニーズに合った教育を保障するというインクルーシブ教育の理念が重視されており，そこには「社会への参加」が重要な視点として位置づいている。このような背景から，障害児と健常児が相互に関わりあって関係を築いていくことは，障害児の社会参加に大きな役割を果たすといえる。しかし，保育に関する近年の研究動向に関して，専門機関との連携や巡回相談に関する研究が増加してきていることが明らかになった<sup>2</sup>。そして，2004年以降，障害児と健常児の相互作用に関する研究は充分には進められてきていない。そこで，ノーマライゼーションやインクルーシブ教育が重視される現在，障害児と健常児が支え合っていく社会を築くためにも，人との関わり基礎が作られる幼児期に，障害児と健常児の仲間関係がどのように構築されていくのかを明らかにする必要があると考える。

本研究では，統合保育を行う保育所での参与観察を通して，仲間関係がどのように形成されていくのか，また健常児とともに生活することで対象児の障害による不自由さや活動への意欲がどのように変化していくのかを明らかにすることを目的とする。

なお，本研究は修士課程で執筆した論文であるが，筆者は本研究に先行して，2012年4月～2012年12月まで事例研究を行い，「障害児の自己主張の発達による人間関係の構築と統合保育の在り方」

(2012)を研究題目として卒業研究をまとめている。卒業研究時に得られた結果を第Ⅰ期，修士課程で得られた結果を第Ⅱ期とし，本研究では主に第Ⅱ期を中心にまとめる。

<用語の定義>

---

\* 鳥取県立倉吉養護学校 平成26年度鳥取大学大学院地域学研究所修了

\*\* 鳥取大学地域学部地域教育学科

本研究では、同じ年齢の障害児と健常児が、同じクラスに在籍しながら保育されていることを「統合保育」と定義する。

## II. 方法

### 1. 調査対象

鳥取県内で統合保育を行う保育所(Z 保育園)に通園する肢体不自由児(X 児)と対象児が在籍するクラスの子どもたちを対象とした。

対象児のクラス：4 歳児クラス<sup>3</sup>の在籍児は 34 名。(男児 15 名, 女児 19 名)

2 歳児クラス, 3 歳児クラス時は 2 クラスとなっていたが, 4 歳児クラスでは 1 クラスとなった。

### 2. 対象児について

名前：X

性別：男

障害名：脳性麻痺

暦年齢：5 歳 7 カ月 (2014 年 11 月時点)

所属：Z 保育園 4 歳児クラス (2014 年 11 月時点)

以下に対象児の対象児の実態 (2013 年 6 月～2014 年 11 月) を示す。

<身体の状態>

麻痺の状態は, 下肢の麻痺が強く, 上肢の麻痺は軽い。自力歩行は困難であり, 移動は床を這うように移動する。つかまり立ちは可能。手指の操作に関しては, 不器用さはあるものの, 折り紙を折る, ハサミを使うなどの動作は可能である。ペンの使用の際には親指, 人差し指, 中指の 3 本の指を使ってペンを持つことができる。行事の時などには, 車椅子を使用することもある。

<言語・認知>

本研究が開始される以前から, 保育者, 保護者共に知的な障害はないという認識だったが, 2014 年 10 月に対象児が通院する病院で受けた新版 K 式発達検査の結果では, 「4 歳前半の力」であるという結果が出て, 発達の遅れの疑いが指摘された。

しかし, 観察の中で見られる対象児の様子を見ていると, 身体を使った活動や身辺自立に関しては, 保育者の支援が必要な場合もあるものの, 保育者の話や保育活動の内容に関しては理解し, 活動に取り組むことができている。そのため, 身体的な困難さ以外の面では, 年中クラスでの保育における困難さは目立つことはない。

### 3. 調査期間

第 I 期 2012 年 4 月～2012 年 12 月

対象児の年齢：2 歳 11 カ月～3 歳 7 カ月

第 II 期 2013 年 6 月～2014 年 11 月<sup>4</sup>

対象児の年齢：4 歳 1 カ月～5 歳 7 カ月

## 4. 調査方法

本研究は、参与観察を実施した。観察は主に午前中に行った。午前中には、朝の会や製作活動、外遊びなどクラスでの活動、行事の練習や、体操や避難訓練などのように園全体で行われる活動が実施された。

筆者は、ボランティアスタッフとして保育に参加し、対象児を中心として子どもたちと一緒に遊ぶなど、子どもや保育者と直接関わりながら保育の観察を行った。観察中の関わり方としては、教室移動や製作活動など、大人の助けが必要な場合には、対象児と一緒に活動を行い、対象児と他児の関わりがあるときには、子どもたちから距離を取って観察を行うこともあった。

記録方法としては、写真、動画の撮影とその場での筆記の記録を行った。そして、エピソードを中心として、一日の流れをまとめた。筆記の記録については、子ども同士の会話などをその場で記録した。

本研究では、保育所、対象児の保護者に研究の概要や方法について事前に説明している。保護者に対しては、研究協力の説明書を読んでいただき、同意書を得たうえで、研究を実施した。動画や写真の撮影、発達検査等の結果などに関しても、筆者が保護者や保育者に直接お話しし、許可を得た上で論文に反映させている。

## Ⅲ. 第Ⅰ期の結果と考察

### 1. 結果

X児の自己主張は指さしから言葉へという方法の変化と、内容は自我を発揮した主張、友だちを意識した主張へと変化していった。また、対人関係については保育者から友だちへと広がっていることが明らかになった。各時期の特徴を表1に示す。

表1 各時期の対人関係の特徴

時期	年齢	特徴
第1期	2歳11カ月～3歳0カ月	大人との関係の中で自己の要求を充実させる時期
第2期	3歳2カ月～3歳3カ月	大人との関係をベースにして、言葉で主張する時期
第3期	3歳3カ月～3歳5カ月	他児からの関わりを受けて、仲間関係を広げていく時期
第4期	3歳5カ月～3歳7カ月	自ら他児に働きかけて、仲間関係を築く時期

### 2. 考察

観察当初のX児は、発語が少なく、対人関係も大人との関わりが多くを占めていた。第1期では保育者や筆者など、X児にとって安心でき、思いを受け止めてもらえる人との関係を築いていったが、そのことによって自我を太らせ、要求を明確にしていく時期だったと考えられる。第2期では、発語が増え、X児の主張も明確になっていった。この背景には、受け止められる安心感と、大好きな人に思いを伝えたいという気持ちが育っていったことが挙げられる。そして第3期には、X児が他児を意識している姿が頻繁に観察されるようになった。X児との言葉でのコミュニケーションが取りやすくなったことによって、他児はX児と関わろうとする機会が増え、それに対してX児も他児を意識し、「自分も同じようにしたい」という憧れを抱きつつ、困難な活動にも取り組んでいた。また、第4期には、第3期で見られた他児との関わり方が発展し、X児から他児に働きかける様子

が観察された。第1期から第2期にかけて、大人との関わりの中で思いや要求を膨らませてきたX児であったが、第3期に友だちからのアプローチを多く受けたことによって、X児の中で友だちの存在が大きくなり、第4期には、これまで培ってきた「大きい自分」を友だちの中で発揮できるようになったと考えられる。

これらの結果から、対象児は自分の思いを主張していくことを通して、大人との関係を築き、そして友だちとの世界を広げていったことが分かった。

#### IV. 第Ⅱ期の結果

##### 1. 仲間関係の変化

2年間の観察で見られたX児の姿と、他児との関わりを時系列でまとめた結果、第1期から第5期までの5つの時期をとり出すことができた。

1) からは、各時期で見られた代表的なエピソードを挙げる。

エピソードに出てくる人物については、以下のように記述した。

<X: 対象児, 安本: 筆者, その他のアルファベット: 他児, ○○先生 (仮名): 保育者>

##### 1) 第1期 2013年7月～ X児の年齢: 4歳3カ月～

<特徴> ・リーダー的な存在のB児の主導的な関わりによって、X児とB児と一緒に過ごすことが多くなる。  
・友だちと一緒に過ごすことを求めたり、友だちの様子をじっと見るなど、活動の中で友だちの存在を意識している姿が見られる。

##### エピソード1 【身体の不自由さを責められるX児】 (4歳5カ月)

運動会の練習途中、テントに入り他クラスの競技を見学する。テントの中でXは先生に用意してもらった台(大きな積木のようなもの)に座っていた。

Xは自分で体勢を変えようと台の上を移動していた(お尻をずらして?)が、バランスが悪く、台から落ちそうになっている。

安本: 「Xちゃん危ないで。」と体を支える。

B: 「Xちゃん, 危ない。」Xの体勢を戻そうとする

X: 「やめてよー!! 僕がする。」B児に対して。

安本: 「Xちゃん, 自分でするって。」

B: 「だってXちゃんいつも座らせてもらって, イス押してって言うし, 自分でできんがよー。」

安本: 「Xちゃんはできないことはみんなにお願いするけど, 自分でできることは自分でやりたいと思うよ。ね, Xちゃん。」

B: しぶしぶ手を引く。

X: ちょっと暗い顔。自分で体勢を戻す。

##### 2) 第2期 2013年11月～ X児の年齢: 4歳6カ月～

<特徴> ・遊びを通して、同性の友だちとの関わりが増える。  
・友だちに対して強気な態度、発言が表れ出す。

・X児がB児と同じことをしようとする等、B児の行動や発言を向うような姿を見せる。

### エピソード2 【B児の行動に合わせてしようとするX児】 (4歳11カ月)

Xが登園してきたときには、お店屋さんごっこがちょうど終わったところで、子どもたちは絵本やおままごとをして遊んでいた。

ロッカーに荷物を置きにいったXに筆者が「Xちゃん、おはよう」と声を掛けるが、筆者を通りすぎて、絵本を読んでいる友達の所に向かう。

X：「Bくん、迷路の本しよー！」

B：新しく買った、迷路の本に夢中でXの声かけに応えない。(気付いていない?)

X：Bに伝えてもらえず、少ししょんぼりとしていた。本を手に取り、中を見る。

この間、筆者はXの斜め後ろの座っていたが、こちらに視線を向けない。

Bが絵本についているシールを貼っているのを見て、Xも自分の見ている本からシールを見つける。

X：「Bくん、シールあったよ。どこに貼る？」

B：「ここに張ればいいが。」(本を指さしながら)

Bは再び自分の持っている本に夢中になる。

先生より、「シールははがさないで」と声がかかる。

Xは、迷路をする。初めは自分で、指を使って迷路をだどっていたが、「ゴールはどこ？」と聞いてきた。筆者が「ここだよ。」と教えると、筆者の方を向きつつ、また迷路をしていた。

### 3) 第3期 2014年4月～ X児の年齢：4歳11カ月～

- <特徴> ・筆者に対して睨むなど、反抗的な姿を見せるが、他児がいないところでは筆者に話しかけてくるなど、友だちの存在の有無で筆者に対する態度が変わる。
- ・共通の話題がある友だちN児との関係が観察され始める。

### エピソード3 【気が合う友だちNとの関係ができ始める】(4歳11カ月)

給食の準備をするときのこと。筆者がXのそばにいと、Nが来る。

N：「NちゃんいつもXちゃんのおかず運んどる。」

安本：「そうか、ありがとう。二人は仲良しってことだね。」

X：笑顔でうなづく。

安本：「いいな～、仲良しのお友だちがいて。」

X：Nに抱きつき「好き！」

机に座るとXとNはおしゃべりをしている。

N：「ピーナッツアームズ食べたことある？」

安本：「ピーナッツアームズ？それってお菓子なの？」

X, N：筆者の質問は聞こえていない。

二人で「ピーナッツアームズ」と言い合って大爆笑している。

X：「ブロッコリーアームズ！」その場のノリで作ったように言う。

N：「ブロッコリーアームズ？なんだそれ？」

X:「なあNちゃん、本当でこれピーナッツだでな？」給食のおかずを指して。

\*ピーナッツアームズ・・・仮面ライダーに出てくる変身後のキャラクター

#### 4) 第4期 2014年5月～ X児の年齢:5歳0カ月～

- <特徴> ・休憩時間などの隙間の時間に、子ども同士で集まり、子どもだけで会話をしたり、遊ぶ姿が見られる。
- ・N児と過ごす時間が多くなり、X児とN児の関係が深まる。N児がX児に対して対等に接することで、X児も安心してN児と関わろうとする。

#### エピソード4【N児O児と触れ合い遊びを楽しむX児】(5歳0カ月)

音楽広場では、達也先生がうたを歌いながら、手遊びやペアでするような触れ合い遊びを教えてくれる。始まる前、二人ペアになって4列で並ぶ。Xはペアがないので、筆者と後ろの方に並んでいたが、少し前にいるNの隣に移動。まねっこ遊びが始まるとNの横で参加。

(～中略～)

次は、ペアでの触れ合い遊びだった。XはNの手をつないで「Nちゃんと。」と言ったが、Nにはペア(O)がいたために、筆者が「3人でしょう。」と提案し、3人することになった。

人差し指をハチに見立てて、そのハチが友だちの体にとまるという遊び。3人で、向かい合ってお互いの体をつつきあって「きゃきゃきゃ。」と笑いながら楽しそうに活動していた。次の触れ合い遊びの時にも、Nが「3人でしょう。」と言い、その後もずっと3人で活動した。

(～中略～)

終わりの時間になると、みんなが最初のようにペアで並んだが、NとXは床に寝ころんでいた。Nが「終わりたくない。」と言ったので、「そうだよな。楽しかったもんな～。」と筆者が声を掛けた。すると、Nは「楽しくなかったし。」という。それに続いて、Xも「楽しくなかったし。」と言う。

#### 5) 第5期 2014年7月～ X児の年齢:5歳2カ月～

- <特徴> ・他児がX児の不安に共感したり、X児の頑張りを受け止めるような会話や関わり方を  
する。
- ・製作活動では、友だちに教えようとしたり、ものを貸そうとする姿が見られる。

#### エピソード5【苦手なことを共有するX児とN児】(5歳2カ月)

この日はプールでの活動。

(～中略～)

プールサイドで見学している時。

N:「なあ水嫌い？」Xの隣に座り、少し真剣そうに聞く。

X:小さな声で「うん。」

N:少しほっとしたような顔をする。

「当たり前、当たり前、あたりまえ体操」と歌う。

X:歌を聞いて笑う。

安本：「Nちゃんもお水苦手？」

N：「うん。」

## 2. 仲間関係の変化と身体を使った活動の変化

仲間関係の変化とともに、対象児の身体を使った活動にも変化が現れたことが明らかになった。

### <第1期～第3期>

- ・ダンス練習では笑顔が少なく、楽しんでいる様子が見られない。
- ・先生とのやり取りを楽しむ。
- ・触れ合い遊びでは、遊ぼうとせず、友だちをじっと見ていたり、関心がないような姿が見られる。

### <第4期>

- ・触れ合い遊びでは、「Nちゃんど。」と言って、N児、O児とともに活動を楽しむ。
- ・踊りの練習では、上半身を動かして、真剣に踊る。

### <第5期>

- ・プールでの活動や鉄棒など身体を使った活動において、充実感を感じていると捉えられる姿が見られる。
- ・友だちに見られたり、応援される機会が増える。
- ・初めてプールで、ワニ歩きができるようになる。
- ・触れ合い遊びでは、N児とペアになり、積極的に楽しむ。
- ・初めは怖がっていた鉄棒に取り組む。
- ・運動会のダンスでは、楽しそうに踊り、子どもたちが集まる場面では笑顔が見られる。

## IV. 考察

### 1. 対象児の仲間関係の形成

対象児の仲間関係は、対象児のお世話をしようとするB児の主導的な関わりを受け、B児の行動を伺うような不安定な仲間関係から、N児との対等な仲間関係へと質的に変化していった。

第1期から第2期にかけては、自我が充実していく中で「自分のことは自分でしたい」という気持ちをもっていた対象児と、対象児のお世話をすることで「大きい自分」を感じたいB児、という関係があったため、クラスの中でも行動力があり主導的な関わりをするB児に対象児が気を遣う形での仲間関係が築かれたと考えられる。

しかし、第3期以降には、N児というキーパーソンが現れ、対象児の仲間関係に変化が生まれた。N児との仲間関係の特徴は、対等な仲間関係が築かれたことである。この変化には、好きなアニメが同じ等共通の話題があること、N児のおおらかな性格によって、対象児がN児に気を遣うことなく過ごせたことが要因だったと考えられる。また、対象児とN児の間には、不安なことを共感し合う姿も見られた。4歳頃の発達の様式として、「～ケレドモ・・・スル」という2次元可逆操作を獲得していく。日々の活動の「やってみよう、でもちょっとコワイな」と二つの思いの中で揺れる対象児とN児であったが、一緒に活動し弱さを見せ合うことで、互いに励まし合い、不安な活動も乗り

切ることができたと考えられる。対象児の仲間関係において、「対等に関わることができる仲間」の存在が重要であり、その存在を中心に対人関係が広がったという事実が明らかになった。このように、統合保育における仲間関係では、発達の視点と対等な仲間関係であるかどうかという視点が重要であることが明らかになった。

## 2. 肢体不自由児における身体活動の重要性

仲間関係の深まりとともに、対象児の身体を使った活動への取り組み方にも変化が生まれた。

対象児は、身体に障害があり、他児と同じ活動を自力で行うことは困難だが、それでも、身体を使った活動が対象児の発達にとって必要不可欠であることが分かった。また、身体を使った活動が充実していくためには、その活動ができたかどうかだけではなく、友だちと同じ活動をして、同じような不安を抱えつつ、その活動を乗り越えた時の達成感を分かり合えるような共感的な仲間関係が重要である。さらに、苦手な運動課題に対して、抵抗を乗り越え、自分でできたという達成感を感じられるような活動が保障される必要がある。

## 3. 障害児の仲間関係から見る統合保育

統合保育に関する先行研究において、勝亦（1999）は、障害児は大人や健常児の愛情を感知し、成長していくことを統合保育の効果として挙げている<sup>5</sup>が、本研究でも同様に、健常児との関わりの中で、対象児自身が友だちに大切にされたり、好かれていることを感じ取って、活動の幅を広げ、成長していくことが明らかになった。また対象児は、健常児と同じ活動を行うことで、健常児からの刺激を受けて活動に取り組んだが、この点に関して、勝亦（1999）の研究結果と一致している。対象児にとって、健常児は仲間であると同時に、身体に障害がある対象児にとっては時に憧れの存在であり、健常児が行う活動は魅力的であったと考えられる。日々の生活の中で、身体活動においては一歩先を行く健常児の姿は対象児にとって刺激を受ける存在であり、健常児の存在が対象児の発達に大きな影響を与えていた。

また、対象児は病院でのアセスメントにて、「4歳半の発達の力」というように発達の遅れの疑いが指摘されたが、4歳児クラスということで同じような発達段階の仲間と生活している実態があった。同じような発達段階にいる子どもたちと共に過ごすことで、共感的な仲間を得ることができたという点で、対象児にとって統合保育が果たす役割が大きかったことが伺える。

一方で、中坪ら（2000）<sup>6</sup>や野口ら（1993）<sup>7</sup>が指摘したように、本研究では対象児が健常児から注意や叱責など、否定的な関わりを受けることも明らかになった。しかし、このことについては、子どもの発達という視点と、対等な仲間関係という2つの視点で見ることで、関係が改善されるということを本研究が示唆している。発達の観点としては、子どもたちの自我の育ちを考慮することが必要である。また、対等な仲間関係という観点で見ると、注意や叱責など否定的な関わりには一方的な関わりだといえるが、対等な仲間関係を形成することができれば、その関わりは一方的ではなく、双方向な関わり方になる。活動の中で互いの不安や達成感を共有することで共感的な関係が作られ、否定的な関わりが減少していくと考えられる。

仲間関係を作っていく上では、発達の視点と対等な関係であるかどうかという視点が重要であり、これらのことが統合保育における仲間関係の形成の際に吟味されるべき要素であることが示唆された。



## V. 今後の課題

本研究では参与観察を通して、肢体不自由児の仲間関係形成の過程を明らかにしてきた。子ども同士が関わる場面を中心に観察し、その時の子どもたちの様子から、仲間関係を変化させた要因について考察を行った。

しかし、エピソードにあげたような子どもたちの姿は、子どもたちのみの相互作用で起こったのではなく、保育者や筆者、環境など様々な要因が影響し合っで見られる姿だと考える。事例研究において、保育者の保育観やクラス作りの方向性など、どのような意図をもって保育が行われていたのかという点についても、保育者へのインタビュー等で明らかにする必要がある。また、参与観察を実施するにあたって、筆者は対象児を含めた子どもと直接関わるが多かった。そのため、筆者の発言や態度が子どもたちに何らかの影響を与えていたと考えられたが、その詳細を検討するまでには至らなかった。筆者自身の子どもへの接し方を分析し、筆者が子どもたちにどのような影響を与えていたのかという点についても、考察を深める必要があるであろう。

また、本研究では参与観察において、対等な仲間関係の重要性を明らかにしてきたが、保育現場で活かすことができるような、対等な仲間関係を築くための保育実践や内容の検討を行うことが今後の課題としてあげられる。

- 
- 1 中村尚子 (2014) 「3、保育最前線レポート 1 障害児施策・障害児保育の現状と課題」全国保育団体連絡会・保育研究所編 「2014 保育白書」 ちいさいなかま社 pp154-157  
平成 24 年度における、保育所における障害児の受け入れ状況は特別児童扶養手当支給対象児童数が 11,264 名である。
  - 2 石井正子 (2010) 「日本における統合保育の進展と研究動向—統合保育の成立からインクルーシブな保育へのパラダイム転換まで—」昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要第 19 巻 pp.15-28
  - 3 4 歳児クラスに在籍する子どもたちは、4 月 1 日の時点での年齢で 4 歳になっている子どもたちであり、その年度に 5 歳になっていく子どもたちが在籍している。2 歳児クラス、3 歳児クラスも同様。
  - 4 第 I 期は週に一度の観察を行い、第 II 期に関しては、2013 年 6 月～2014 年 3 月までは 1 カ月に一度程度の観察を行い、2014 年 4 月～2014 年 11 月末までは週に一度の観察を実施した。
  - 5 勝亦すゑ子 (1999) 「さくらキンダーガーデンにおける統合保育の成果—障害児 S ちゃんの 3 年間の歩み—」日本保育学会大会研究論文集第 52 巻 pp.780-781
  - 6 中坪史典・上田敏文 (2000) 「統合保育場面における障害児を取り巻く人間関係」保育学研究第 38 巻第 1 号 pp.54-52
  - 7 野口裕子・田中道治 (1993) 「統合保育における精神遅滞幼児と健常幼児の相互作用過程」特殊教育学研究 31 (3) pp.37-43

(2015年10月2日受付, 2015年10月6日受理)